

悠久の河

周藤彌兵衛翁物語

村尾 靖子

孫娘

彌兵衛は足を止めて、少女をじっと見た。見覚えが無かった。ほろをまとったわが身と伸びた髭面が彌兵衛に、これ以上、近付くなど足を止めさせた。

「おじいさまと呼んでおるわ。変わった少女よのお。どこの子やら…」

呟きながら、彌兵衛は、女の子の着物の色に見覚えが有るのを思い出した。

「おう、そうじゃ。あの娘は意宇川の川辺によく座っておるわ」

ぶつぶつ言いながら彌兵衛は、少女の近くの岩に腰掛けた。

「おじいさま、握り飯を持って来たのよ。おかあさまには内緒よ」

少女は、近くで彌兵衛を見ても、逃げるでもなく、恐れるでもなく、ほろをまとった老人に人懐こい笑顔を見せた。

「わしに握り飯をくれると言うのか」

彌兵衛は、少女の顔をしげしげと見た。

「色白で、目鼻立ちの整った少女の面差しは、誰かに似ている。——」

彌兵衛は、そう思った。

「——そうだ。一日も忘れたことの無い娘のゆうに似ている。——」

「いやいや、亡くした娘のゆうに似ているなどは、わしの目は、どうかしているわい。ゆうを忘れられず、この娘に、ゆうを重ねて見るとは、わしも歳をとったもんじゃ」



画 高田勲

彌兵衛は、久々に柔和な表情を見せた。

「なぜ、わしに握り飯など……?」

「おじいさまが、好きだからよ」

「なぜ?」

「おじいさまは、山にばかりいて、岩を削ってばかりいるから、わたしの生まれたのを知らないでしよう」

「そうじゃのう。どこから来たのじゃ?」

「隣村よ」

「ここまで一里(四キロ)の道をか」

「そうよ」

「歳は何歳になる?」

「五歳よ」

「名は、なんと云う?」

「つるよ。周藤つる。お父さまの名は、周藤勘六よ」

彌兵衛は自分の耳を疑った。

「何度でも言うわ。周藤つる。お父さんの名は周藤勘六。おじいさまの息子でしょ。おじいさまは岩ばかり削っているから息子の名前も忘れたの?ちゃんと、おぼえていたの?」

濁りの無い無邪気な目が、いたずらっぽい表情を見せた。

「お父さまは、わたしの生まれたころは、わたしの家に住んでいたんですって。でも、おじいさんが岩山に登ったから、ときどき、こっそり」としか帰ってこられなくなってしまうたんだって、お母さんは怒っているのよ」